

「なんて嫌なやつ」

多谷 昇太

生来気が弱かったぼくなのに  
他人の目におびえてたぼくなのに  
社会がぼくを強くした  
世間がぼくをぶとくした  
あげく得意にさえなりました  
群れていじめて無関心  
一色偏向社会とあきれはて  
またそう決めつけて  
心に鎧をまとってから  
ぼくは人を拒絶し 人に冷たくなりました

それこそ疎遠社会の立派な一員と  
無関心 傲慢な人たちのひとりだと  
横面張られる思いのぼくでした  
だからぼくはこう云い直します  
世間に染まってしまったぼくでした  
社会にめくらにされてたぼくでした  
けっして強くなつたのではありません  
無為傲慢だったと申せましょう  
「さてそれならば？」  
誰かがぼくに聞いてます  
さてそれならば……まだわかりません  
いつそ  
また弱くなりましょうか  
また人の目を気にしましょうか  
もいちど人生やりなおしたいから  
苦しむ他人に気づきたいから  
, 人, の, 間, に裸のところでたちかえり  
もいちど人間はじめましょう

「なんて嫌なやつ」  
もうそう呼ばれたくはないのだから  
「なんて弱いやつ」と  
そう呼ばれ 笑われたほうが  
よっぽどいいのだから

同苦同悲の 涙の苦海に浸りたい…



詩の寓意、進入禁止！（だった…）